

平成24年度「産業社会と人間」実践報告

「産業社会と人間」委員会 平野延行・渋木陽介・吉岡昌悟
田中友紀子・川上有正・岡 聖美
中井 毅・今野良祐・茂木好和

要旨：前年度より移行した新教育課程において、補完科目であった「産業理解」が発展的な解消を遂げ、「産業理解」の精選した内容を「産業社会と人間」の中に組み込む形でスタートを切ってはや2年目となる。本稿は実践報告やアンケートをもとに、適切な実施方法を模索するとともに、現われてきた問題点について考察する。

キーワード：自己理解 他者理解 キャリア教育 時間数減

1. 年間授業計画

本校における当科目は、本校開発科目である「産業理解」と併せて、実質上4単位で実施していた。教育課程の改定にともない、平成23年度入学生よりこれを発展的に改組し、当科目単独の2単位として実施することとなった。本年度は、2単位による授業展開の2年目である。授業計画作成にあたっては、前年度の実践をふまえて内容の精選や配置の工夫を検討した。年間の授業計画は別表の通りである。

以下、本年度の実践内容のうち、特に主要なものについて報告していく。

2. 実践報告

2-1. コミュニケーション・キャンプ

1) 主題：自分を見つめる

2) ねらい

①新しく知り合った新入生160名の仲間との友情を培う

②総合学科における学習姿勢について学ぶ

③黒姫高原の自然に触れ、人間と自然が調和している環境で生活することを学ぶ

3) 事前準備

引率担当者が前年度までの実施内容を確認し、本年度の方向性を確定した上で、現地の下見を3月に行った。現地とのやりとりは電子メールを中心に行った。

下見では、プログラム原案に沿って、マウンテンバイクの試走、森散策、各活動を担当するインストラクターとの打ち合わせを行った。

入学者の確定後、新入学生と保護者へキャンプについての説明を行い、必要な調整をホテルとインストラク

ターへ発注した。特に入学生の体調や食物アレルギー等の調査や健康相談を丁寧に行った。

4) 内容

入学式の翌日から3泊4日、長野県黒姫高原にて実施。生徒同士のコミュニケーションと毎日の振り返りを重視してプログラムを作成した。活動の指導はインストラクターに一任し、各活動の間、教師は生徒の観察を行った。インストラクター、教師共に、生徒に働きかけをする際は、生徒が自分を知り、また他者を知り、その上で自他を尊重できることを支援の目的と設定した。各活動の内容について、以下に報告していく。

①アイスブレイク：

協働作業が求められるゲームを通じて、生徒相互に積極的な関係を築いていく。

②マウンテンバイク：

急勾配の坂道を含む長距離を、チームで走破する。体力や自転車への習熟度に個人差があり、それを補い合うことで積極的な関係性を形成していく。また、走行ルートを生徒が話し合っで決定することにより、コミュニケーション機会を供給する。チームごとにインストラクターが帯同し、安全管理を行う。

③森散策：

インストラクターに先導され、雪の多く残るホテル周辺の森を散策する。環境的な困難さの中で協調する過程を通じて自己理解、他者理解を図る。また、仲間と離れ、自然の中でひとりになる時間を設定し、自分と向き合う。

④クラス対抗レク

実際の学校生活を共にするホームルーム単位での活動。クラス全員が協力しあって解決していくゲームによる対抗戦を行った。2回目は校歌合唱会とし、校歌練習の時

間を設けた上で、その成果を発表した。

5) 申し送り・成果

当キャンプに期待される最大の効果は、生徒に不安を供給し、それゆえに自他が支え合うことの必要性を感じさせることにある。入学式の翌日から見知らぬ人々と、見知らぬ土地に、しかも4日間の長きに渡って閉じこめられることの意義はそこにある。不安を持つ者は他者の支援を必要とする。しかしそれゆえに、支援を必要とする他者に対して寛容になれる。そして可能であれば、自分自身がその支援者になろうと思える。こうして形成されるのが、新しく知り合った者同士がゆるしあい、補い合い、支え合う、積極的な人間関係である。

生徒の振り返りからは、当キャンプが、自分自身を改めて見つめる上で、そして他の新入生との積極的な人間関係を形成する上で、良い機会となったことがうかがえる。例年のことであるが、当初参加に消極的だった生徒が、参加できて良かったと振り返っている。また日常の生活圏ではできない自然体験に感動する生徒も多くあった。

ただ一方、特にマウンテンバイクにおいては、転倒や自動車との接触等、危険な事態が発生した。走行ルートの調整やインストラクターの教などを検討し、安全面に更なる配慮をする必要がある。

昨今、参加生徒の体力や人間関係形成能力に変化が生じているように思われる。また、実施側の教員・インストラクターにも、実施経験に濃淡がある。それを踏まえ、キャンプ全体や各活動の目標を明確に持った上で不明点をひとつずつ解消し、十分な準備をする必要がある。

2-2. 菜園作り

1) 主題 : 「自己を見つめる」

2) ねらい

①作物の生育調査を通して植物の生命の活動を実感し学校生活の自分の変化と二学期以降の学校生活について考える機会とする。

②日頃口にしていない野菜や食料の重要性について気づき、今後の生活のなかで食を大切にすることを育む。

③各自の畑で栽培することにより責任感を育むとともに、班として組織で活動することで組織での連携力を高める。

3) 実施方法

圃場を1人当たり1.5m×1mとし、8名1グループとした。1人あたりトウモロコシ(ゴールドラッシュ)を6株を栽培した。

授業では、教員が班長に作業内容と作業の注意点を指導し、班長が班員に伝達することを重視した。本単元の日程は以下の通りである：

4月3週目 1単位時間

菜園ガイダンス 施肥・整地実習

4月4週目 1単位時間

生育調査について 定植・かん水

5月4週目 1単位時間

生育調査 除草、土寄せ、追肥

6月中旬 放課

土寄せ、摘果

7月11日 期末考査後

収穫 片付け

生育調査については、生育調査期間は4月4週目～7月1週目の期間で12回を必修とした。また、日々のかん水、除草は各自が行うよう指示をした。日々の管理作業の内容は、圃場前にボードを設置し生徒が見て管理できるようにした。

4) 成果・申し送り

昨年度より4単位科目から2単位へと時間数が減になった。そのため授業内での菜園管理や生育調査の指示が十分にできなかった。圃上前のボードで作業や観察ができるよう工夫はしたが、生徒に管理作業を理解させ積極的に実施させることは難しかった。

その結果、授業は管理作業が中心となり、ねらいに関する声掛けや手だてを取ることができなかった。また、6月中旬の台風によりトウモロコシの倒伏や病害虫対策の遅れなどが原因で、生育不良となり収穫ができない生徒もいた。それに対する教育的な措置もとることができず、栽培のむずかしさや苦労ばかりが生徒の印象に残ってしまった感が強い。

しかし、そのような中で、個人差はあるものの、収穫に向けて地道に管理作業を行い、栽培におもしろさを感じ、食と農業の重要性を考える生徒もいた。

菜園づくりは、実際に作物の生長に向き合わせ、自然科学や社会科学に対する好奇心をふくらませ、一方で農業という産業と自分の関係、農と食の重要性を理解させる教材である。本教材を生かすためには、よりきめ細やかな振り返りが不可欠である。2単位での授業実践となった現在、配当時間の工夫、若しくは、ねらい自体の見直しが必要である。

2-3. 特別支援学校生徒との交流

1) 主題：「自分をみつめる」

2) ねらい

①同じ年代の人々との交流を通じて、他者理解、自己理解をすすめる。

②障害について理解を深め、ノーマライゼーションの実現のためにできることについて考える。

3) 実施日程：

1 A：10/31（水）

県立盲学校（塙保己一学園 川越市笠幡）訪問

1 B：11/1（木）

大塚特別支援学校（文京区春日）来校

1 C：10/15（月）

桐が丘特別支援学校（板橋区小茂根）訪問

1 D：10/13（火）

聴覚特別支援学校（市川市国府台）訪問

4) 準備・内容：

交流校との事前打ち合わせを4月から始め、本校代表生徒の事前訪問などを経て当日を迎えた。また、事前学習として、9/19（水）に本校の福祉科教諭より「障害について考える」というテーマで講義を行った。事後の取り組みとしては、人と人とのつながりを深めるという主旨に沿って、礼状のやりとりを行った。

以下、実践報告として、1年B組の取り組みを紹介する。1年B組では大塚特別支援学校を本校に迎え、地域の清掃活動を行った。協働作業を通じて互いの交流を円滑にし、相互の理解を深めることがねらいであった。関係する活動は以下の通りである：

10/04（木）特別支援学校について

（附属大塚特別支援学校高等部の特徴）

10/24（水）知的障害特別支援学校との交流に向けて

・知的障害のある人への接し方を学ぶ

（映画「学校Ⅱ」鑑賞）

・交流に向けての準備（自己紹介カードの作成、地域清掃活動の理解）

11/01（水）大塚特別支援学校高等部の生徒との交流及び共同学習

・清掃活動、昼食会、ポスター各グループ発表、活動のふりかえり など

5) 成果・申し送り：

交流会後の生徒の感想として、「知的な発達がただゆっくりなだけだ。ちょっとのサポートで楽しく一緒に仕事ができる」「実際に多くの人が交流をすべきだ。違いを認

め合い分かり合おうとすることが大事だ。」など交流に対して前向きな意見が多く見られた。

反省点としては、事後学習の時間が十分にとれなかった点があげられる。高校入学時、既に障害者に対する差別や偏見を持ち合わせない生徒が増えている。これは中学校段階までの交流教育の成果であろう。であるとすれば、高校段階での本校の教育活動は、これまでの「考え方の変容」ではなく、「考えの深化」や「行動への発展」へと発展して然るべきである。その意味で、事後学習によって本年度の体験の展開・深化が十分にできなかったことが、強く悔やまれた。課題として申し送りたい。

2-4. バス見学会

1) 主題：社会の中で生きることについて考える

2) ねらい

①進路選択時の参考とするため、大学、専門学校等の上級学校を訪問する。

②インターネットなどのバーチャルな情報だけではなく、現場の生の声や雰囲気を実感することで、より積極的に進路決定ができるようにする。

3) 内容

①実施：7月12日

②見学コース（バス9台、全12コース）

1号車（農学コース・28名）

1校目 東京農業大学・同短大（世田谷キャンパス）

2校目 日本獣医生命科学大学

2号車（工学Ⅰコース・14名）

1校目 工学院大学（新宿キャンパス）

2校目 法政大学（小金井キャンパス）

3号車（工学Ⅱコース・13名）

1校目 東洋大学（川越キャンパス）

2校目 東京電機大学（鳩山キャンパス）

4号車（生活福祉幼児教育コース・7名）

1校目 埼玉県立大学

2校目 十文字学園女子大学

5号車（文系コース・28名）

1校目 明治大学（和泉キャンパス）

2校目 東洋大学（白山キャンパス）

6号車（看護・医療コース・14名）

1校目 埼玉県立大学

2校目 埼玉医科大学短期大学（毛呂山キャンパス）

7号車（専門学校Ⅰコース 観光旅行 ホテル・7名）

1校目 神田外語学院

2校目 日本外国語専門学校
(専門学校Ⅰコース 動物・12名)

1校目 ヤマザキ動物専門学校

2校目 日本動物専門学校

8号車(専門学校Ⅱコース ビジネス 公務員・8名)

1校目 東京IT会計専門学校

2校目 大原情報ビジネス専門学校

(専門学校Ⅱコース 保育・幼教・福祉・11名)

1校目 竹早教員保育士養成所

2校目 彰栄保育福祉専門学校

9号車(専門学校Ⅲコース 栄養調理製菓・11名)

1校目 香川調理製菓専門学校

2校目 武蔵野調理師専門学校

(専門学校Ⅲコース 理容美容服飾・7名)

1校目 国際理容美容専門学校

2校目 専門学校武蔵野ファッションカレッジ

4) 成果

見学後、多くの生徒から進路に対する具体的で前向きな話を聞いた。

5) 申し送り

今年は事故等もなく、スムーズに進行することができた。男子生徒の割合が増えたことから、工学コースの人数枠を増やしたが、それほど人は集まらなかった。1コースに集約しても問題ないかもしれない。学校手配の見学先のうち、先約があるため断られてしまった学校がいくつかあった。強く見学したい学校がある場合には、早めに動く必要がある。

2-5. 学問と職業

1) 主題 : 卒業後の「学び」について考える。

2) ねらい

上級学校の先生方から話を聞き、将来の進路、時間割作成の参考とする。

3) 内容(大学短大12 専門学校16 就職1全29分野)

【大学短大】

家政系、体育・健康系、人文科学系、教育・幼児教育・保育系、社会科学系

美術・デザイン系、理学系、工学系、薬学系、看護・医療系、社会福祉系、農学系

【専門学校】

栄養・調理・製菓・製パン、ファッション、スポーツ、語学・旅行・ホテル・ブライダル、公務員、ビジネス・医療ビジネス、芸能、デザイン・まんが・イラスト、情報処理・ゲーム・マルチメディア、建

築・インテリア・土木、美容・メイク・エステ、医療、福祉、幼児教育・保育、動物、植物

【就職関連】 就職(民間・公務員)

4) 成果

上級学校や実社会の様子について学ぶ機会は、普通の授業ではどうしても少なくなってしまう。今回の企画では大学・短大および専門学校から多くの先生方や職員の方をお招きし、具体的な話を聞く機会を設けることができ、有意義であった。講師の先生方の熱心な講義に、生徒達も非常にまじめに話を聞いていた。

事前に希望調査を行い、生徒の要望を最大限に優先する形で講座を編成した。講座数が30近くになってしまい、会場確保等で難儀することとなったが、生徒にはきめ細やかな対応を取ることができた。少人数での講座では、生徒はより親密に講師と接することができ、真剣に学問と進路について考えることができた。

昨年度に引き続き、生徒は前後半の2講座を聞くことができ、受講内容の幅を持たせることができた。

5) 申し送り

講座数が多いことから、同一教室で複数の講座が同時進行するなどの対応を取った。9月はじめの段階で希望調査を行ったが、その後希望講座を変更する生徒が現れ、多少混乱した。変更後の希望講座で受講するよう対応したが、「一切変更を認めない」あるいは「変更の締切期日を設ける」等の対処をしても良いかもしれない。今回の授業の趣旨は、本校の立場から見れば「学問と職業」について生徒に学び・考えてもらうことである。一方、仲介業者や各学校は、営業活動の一環として来校していることを否定できない。双方の目的がうまく並立するよう、うまくバランスを取ることが必要であろう。本校側としては、今後も「生徒に学ばせ・考えさせる」ことが第一義であることを、業者や学校に主張していくべきであろう。

2-6. 職場体験

1) 主題 : 社会の中で生きることについて考える

2) ねらい :

①職場体験を通し、健全なる勤労観・職業観を養う。

②職場体験を一緒に行う仲間との人間関係をつくり、役割分担を行い、主体的に動けるようにする。

③職業についての知識を得るだけでなく、職業を通してのその人の生き方を見て、自分の将来を重ね合わせて考える。

3) 事前準備・持ち物 :

職場体験予定表、筆記用具、講師の先生に指示されたもの

4) 成果

「産業社会と人間」では、様々な「経験・体験」を通して、自分に適した進路を考え、その進路の実現に向け、適切な科目選択のためのガイダンス科目であり、社会人講師による「講話」・「職場体験」は、その「体験」の中心的な役割を果たし、成果を上げている。

5) 申し送り

体験先(社会人講師)の確保は特に重要であり、日程に沿って、連絡を密に取りながら進めていくことが必要である。また、講師の方からの意見を、次年度担当者への申し送ることも、継続的に依頼する上で、重要である。

体験先からの報告によると、生徒の参加姿勢はおおむね良好であった。しかし一部、遅刻・忘れ物も発生した。事前指導で、さらに社会規範やマナーの重要性を認識させたい。

また、社会人講師より、3段階(A:特に優れている B:ふつう C:特に劣っている)の基準では評価が難しいとする意見も寄せられた。5段階にする等、検討したい。

2-7. 科目選択(時間割作成)

1) 主題:何を学ぶか・どう生きるか

2) ねらい:

自己実現(遠い未来)へと連なる一過程として高校卒業後の進路(中くらいの未来)を意識し、その実現のための具体的な行為として、本校2年次以降の履修科目(近い未来)を選択すること。

3) 内容:

科目群ガイダンス(5月)

科目選択予備調査(6月)

時間割を作成する(11月)

科目選択本調査(12月)

4) 成果・申し送り:

本年度の成果は、生徒個々の自己実現(遠い未来)を究極的な目標として設定し、そこへつらなる高校以後の社会生活や家庭生活(中くらいの未来)、そしてそこへつらなる高校生活(近い未来)という区切りで生徒の生涯に渡る「キャリア」イメージを提示したことにある。この一本の道程を前提して初めて、単なる出口指導ではないキャリア教育、進路指導が可能になるはずである。

しかし、自分自身の未来について、そして過去と現在について考えさせることに注力した一方で、彼ら生徒を

取り巻く現実社会について、生徒が自ら考え、自ら行動して調べて主体的に理解する取り組みは、不十分であったと感じる。すなわち、以前の「産業社会・産業理解」計4単位のうち、「産業理解」が担っていた部分である。

生徒は高校生なりに努力し、自分の「遠い未来」を思い描き、またそれに続く現実的な道筋を探り、その第一歩としての意味を付与して、翌年度以後に学ぶ科目を選択した。しかし、例えば職業調べや上級学校調べなど、彼らのその意味付与に客観的、現実的な妥当性を加えるための働きかけを、本年度は十分に行うことができなかった。それは生徒個々の自主学習に委ねることになった。時間に限りがある以上、何かを割愛することにやぶさかではない。しかし、もし何らかの工夫により、そうしたことに手当が出来たなら、本年度の取り組みは一層有意義なものとなったはずである。反省として、申し送りしたい。

資料「科目群ガイダンス」ならびに「科目選択」

- 1) 「遠い未来」(=進学や就職の、その先にある自己実現)へ連なる具体的な一過程として、科目選択(時間割作成)を認識し、実践すること。
- 2) 「近い未来」(=時間割にあらわれる、本校2年次以降の学び)を構成する体系的な「視座」として、「科目群科目」についての認識・理解を深めること。
- 3) 独自の時間割を作成する意義、すなわち、「科目群科目」の体系的な視座を保ちつつ、一方で多様な「自由選択科目」を学び、その両者を総合することにより、独自の価値を創造していくということについて、認識・理解を深めること。

3. 「産業社会と人間」年度全体のふりかえり

3-1. 配当時間の妥当性

前述の通り、本科目は、実質4単位で展開していたものを、昨年度より2単位で展開している。限られた時間の中で、本年度は、例えば職業調べや上級学校調べなど、生徒が自分の「キャリア設計」ならびに時間割作成について、客観的、現実的な妥当性を加えるための学習を割愛した。生徒の自主学習、ならびに科目「キャリア・デザイン」において、必要な補完ができることを想定してのことである。こうした時間配当の妥当性について検証するため、生徒の時間割作成終了後にアンケート調査を

行った。回答数は 160、関係部分と回答率は以下の通りである：

3-1 科目選択の前に、進路実現のために必要な情報（必要とされる基礎知識や、入学・就職試験の科目、その受験に必要な単位数など）を収集できましたか。

そう思う：25人(15.6%)
まあそう思う：87人(54.4%)（肯定率：70.0%）
あまりそう思わない：38人(23.8%)
そう思わない：10人(6.3%)（否定率：30.0%）

3-2 (→「そう思う」または「まあそう思う」を回答した人)

その情報は、どこから入手できましたか。

- ①選択を考えている教科・科目の先生 49人(43.8%)
- ②HR担任・副担任の先生 28人(25.0%)
- ③同じ学年の友人 23人(20.5%)
- ④本校の先輩 30人(26.8%)
- ⑤家族 41人(36.6%)
- ⑥インターネットや書籍の情報 64人(57.1%)
- ⑦中学校や塾の先生など、個人的に交流のある学校外の人物 16人(14.3%)
- ⑧上級学校（大学・専門学校等）等の先生や職員の方（説明会など） 32人(28.6%)
- ⑨その他 12人(10.7%)

3-3 (→「あまりそう思わない」または「そう思わない」を回答した人)

どうして情報を収集できなかったのですか。(○をつけて回答)

- ①必要を感じなかったため 4人(8.3%)
- ②進路希望が定まっていなかったため 28人(58.3%)
- ③調べ方が分からなかったため 11人(22.9%)
- ④時間が無かったため 4人(8.3%)
- ⑤その他 1人(2.1%)

回答内容で注目すべきは、やはり、情報収集に関する満足度を問うた 3-1 に対する否定的な回答率と、情報収

集不足の要因である。160名の生徒中48名(30.0%)もが情報収集に不足を感じている。そしてそのうちの28名が希望進路の未確定を理由として挙げ、また一方で、20名は自分の進路にある程度のイメージを持ちながら、情報収集に不足を感じているのである。

一方で、情報収集の満足度に対して肯定的な回答を寄せた112名のうち、その情報収集手段として「上級学校の説明」を挙げた数にも注目すべきである。これは、本科目の中で生徒に提供した情報収集活動である「バス見学会」ならびに「学問と職業」といった、いわゆる進路ガイダンスに関係する項目である。これを自らの科目選択のための情報収集手段として認識した生徒は32名、肯定的回答者のうちの28.6%にすぎない。このことは、少なくともこれら本科目が提供した活動だけでは、生徒の情報収集活動として十分ではないことを示している。

もちろん、高校に入学して数ヶ月の段階で進路希望が確定するはずはない。しかしそれを生徒に強いて考えさせ、考えさせるために確定させるのが科目選択である。生徒に困難な課題を要求する一方で、その支援を出来る限りする必要がある。不安や不明を抱えながらも、生徒自身が自分の情報収集に満足できることが目指すべき到達点であろう。その点に於いて、この回答結果は、反省材料として一考に値する。

しかし、例えば「菜園作り」や「特別支援学校との交流会」の実践報告に示されているとおり、科目選択以外の項目にも不足・不十分がある。それらはむしろ、生徒が自己理解を深め、他者理解を深める点において、進路に関する情報収集以上に重要な項目であろう。

情報収集の不足を補う活動は、やはり、本科目の中でなく、「キャリアデザイン」をはじめとした別の取り組みで補完するべきものではないだろうか。

この「キャリアデザイン」と「産業社会と人間」の今年度の補完関係の分析については、本紀要「キャリアデザイン実践報告」第3節に詳細を譲りたい。

2) 総合学科のアイデンティティ形成を担う基幹科目として

総合学科が誕生してわずか20年にすぎない。そのアイデンティティは未だ確立されてはいない。科目を選択できることに、そのアイデンティティを求める向きがあること自体が、その証拠である。確かに科目選択は総合学科の特徴ではある。しかし科目選択の自由度は表面的な装置に過ぎない。一方で、そうした自由度を通じてどのような教育効果を意図するのか、それこそが総合学科

のアイデンティティたりえる。その点について、明確なビジョンを、私たちは未だ確立できていない。

しかし一方で、「産業社会と人間」は、総合学科の原則履修科目であり、基幹科目である。そして、当科目の実践内容は、科目選択（時間割作成）の支援を主軸として展開されている。そうである以上、科目選択という教材をどのように活かし、そこからどのような教育効果を生み出すかは、すなわち、総合学科のアイデンティティ確立へとつながる実践であると言える。

自由度の高い科目選択がもたらすものは、学びの多様性である。本年度の科目選択の指導・支援にあたっては、そうした多様な学びを総合することによって、生徒自身が、独自の、新たな価値をその時間割に見出すことを目標とした。これは言わば、教師が生徒に正解を教える教育ではなく、教師が生徒とともに正解を考える教育である。「総合的学習の時間」の理念に近似したものであるとも言えるだろう。

多様な学びが総合された時、新しい独自の価値が発生する。その発想の根底には、多様性への肯定がある。それは同時に、異者・異文化への肯定である。同じ学級に、まったく異なることを学ぶ多様な人間が同席している。それらが競いあうのではなく、それぞれに尊重し合い、不足を補い合いながら共生している。普通科、専門科と比べて、総合学科にはそうした学校空間をより形成しやすい素地がある。

多様性の肯定、尊重を前提にした時、「産業社会と人間」が提供する多様な諸活動にも、一本の筋が通る。コミュニケーション・キャンプも、菜園作りも、特別支援学校との交流会も、上級学校の見学も、学問と職業に関するガイダンスも、職場体験も、その他の多くの活動も、自分を知り、一方で多様な他者を知り、多様な生き方を知る場である。そうして学んだひとつひとつを尊重し、総合して自分の生き方に反映させ、その現れとして、時間割を作成するのである。

普通教育、専門教育は、このような理念に軸足を置いてはいないはずである。その点において、このような実践を継続し、積み重ねることは、総合学科のアイデンティティ確立へとつながるように思われる。

総合学科の特長を生かし、多様性への肯定的・積極的な姿勢を生徒に育むことが出来れば、それは従来の教育を補完し、よりよい社会形成に資する営みとなるはずである。私たちは、総合学科のアイデンティティをそこに求めたい。

そのためには、まず第一に、総合学科で実践に取り組

む教員自身が、内面化された前提を克服する必要があるだろう。基幹科目としての本科目のさらなる充実化、ならびにその先にある総合学科のアイデンティティ確立を見据えて、その点も申し送りたい。

【参考・引用文献】

- 筑波大学附属坂戸高等学校（2001）.『「総合学科を創る」』. 学事出版.
- 筑波大学附属坂戸高等学校（2012）.『新時代の総合学科—総合学科パイオニアに学ぶ基本理念と新たな可能性』. 学事出版.
- 加藤敦子ほか（2005）.「「産業理解」6年目の実践報告」.『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要』第43集・pp45～59.

【資料】

平成24年度 1年次「産業社会と人間」指導計画

学期	月	日	主題	単元	各時限の内容	
					5時限	6時限
一 学 期	4	11-14	自分を見つける	総合学科オリエンテーション	コミュニケーションキャンプ	
	4	18		産社オリエンテーション/菜園①	産社ガイダンス	菜園作り
	4	25		菜園②	菜園づくり	コミキャンふりかえり
	5	9	何を学ぶか、どう生きるか	時間割を作る	科目群ガイダンス①	
	5	23		時間割を作る	科目群ガイダンス②	
	5	30		菜園③/科目選択ガイダンス	菜園づくり	予備調査の前に
	6	6	社会の中で生きること	将来を考える	仕事発見ガイダンス	
	6	13	何を学ぶか、どう生きるか	菜園④/時間割をつくる	菜園づくり	時間割入力(予備調査)
	6	20	社会の中で生きること	将来について考える	R-CAPふりかえり	
	6	27		「働く」ことについて考える	職場体験事前指導/職場体験準備	
	7	4	自分を見つける	一学期をふりかえる	一学期のふり返り(作文含む)	
	7	11		菜園⑤	収穫	
	7	12	何を学ぶか、どう生きるか	卒業後の「学び」について考える	バス見学会	
	7	17	社会の中で生きること	「働く」ことについて考える	社会人講話	
	7	17		「学び続けること」について考える	工学研究者(筑波大学)による出前講義	
				提出物・ファイル点検		
二 学 期	9	5	カリキュラムを知る	時間割を作る	ESDについて・進路指導主事の講話	
	9	13	何を学ぶか、どう生きるか	卒業後の「学び」について考える	筑波大学の先生による出張講義	
	9	19	自分を見つける	福祉講話	障がいについて考える	
	10	3	何を学ぶか、どう生きるか	卒業後の「学び」について考える	筑波大学見学	
	10	15	自分を見つける	交流会	C組 附属大塚特別支援学校との交流会	
	10	17	何を学ぶか、どう生きるか	卒業後の「学び」について考える	学問と職業ガイダンス	
	10	24	自分を見つける	交流会	交流会の準備・ふりかえり	
	10	31			A組 塙保己一学園(県立視覚特別支援学校)との交流会	
	10	31	何を学ぶか、どう生きるか	時間割を作る	時間割作成事前指導	
	11	1	自分を見つける	交流会	B組 附属桐ヶ丘特別支援学校との交流会	
	11	7	何を学ぶか、どう生きるか	時間割を作る	科目群授業見学	
	11	13	自分を見つける	交流会	D組 附属聴覚特別支援学校との交流会	
	11	14	何を学ぶか、どう生きるか	時間割を作る	時間割作成相談会	
				提出物・ファイル点検		
三 学 期	12	5	何を学ぶか、どう生きるか	時間割を作る	授業時間割入力	
	12	12			私だけの時間割ポスター発表会準備	
	12	15		考えた時間割を発表する	私だけの時間割ポスター発表会	
	12	19	学んだことを伝える	「ライフプラン」を考える	ライフプランの書き方について	
	1	16			ライフプラン発表会準備	
	1	23			ライフプランHR発表会	
	1	30			ライフプランHR発表会	
	2	13			ライフプラン学年発表会	